

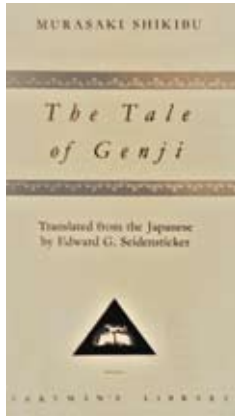


『源氏物語』の翻訳

—国際化の時代の日本古典文学—

文学部 和田 明美

『源氏物語』は今を遡ること約千年、紫式部によって書かれた長編の物語である。平安時代の日本文化や王朝貴族の恋に惹かれて、『源氏物語』をひもとく読者も少なくない。豊かで精緻な物語の叙述は、難解と言われながらも今日まで多くの読者を魅了してきた。



近年『源氏物語』に対する関心は国際的にも高くなっており、『源氏物語』の翻訳がそのブームに拍車をかけている。ケンブリッジ大学留学中の末松謙澄（1855～1920）が、はじめて1882（明治15）年に英語訳を手がけて以来、フランス語・ドイツ語・オランダ語・ロシア語・ポーランド語・フィンランド語・スペイン語・イタリア語・ハンガリー語・チェコ語・スロベニア語・セルビア語・ヘブライ語・ベトナム語・ミャンマー語・モンゴル語・中国語・韓国語等各国語への翻訳（完訳・重訳・抄訳）がなされ続けている。現代における再版・重版・新版や新訳版も含めて、海外出版が今日なお盛んに行われているのである¹。これに加えてビジュアルな『国宝源氏物語絵巻』等の源氏絵やメディアの領域にある漫画・アニメ・映画・舞台等の『源氏物語』の新たな試みが、国境を越え世代を跨いで多くの人々の関心を呼んでいる。

『源氏物語』の言葉の特色は、延べ語数約20万語・異なり語数約1万語からなる語彙の豊富さにある。殊に、紫式部によって新たに作り出された語は物語の独自性を支え、『源氏物語』以前に使用された語も、使用対象の拡大や場面の多様化により表現内容が豊かになっている。『源氏物語』の文章の随所に息づく作者紫式部の深

い洞察力や美意識の背後には、平安貴族社会の自然観や価値観があることは言うまでもない。作品は、四代の天皇の治世約70年余、藤原氏全盛期の摂関政治の下で生じた事件と史実に依拠しつつ、光源氏の一生とその行く末（次世代）を描いている。妻妾婚制度の軋轢に苦悩しながら嘆くより他なかった女性たちのありようや心理をリアルに表しているのである。「螢」の巻の「日本紀など（日本書紀等の正史）はただかたそばぞかし。これら（物語）にこそ道々しく詳しきことはあらめ」は、人間の存在を凝視した物語観のあらわれと見なされる。その一方で、『源氏物語』が千年前の古代信仰や自然観を含み持っていることも事実である。両者兼備のカオス的特性や平安貴族文化に基づく表現、やまと歌と中国（唐）の文化を余すところなく汲み尽くし受容・変容した作品こそが、世界に誇る古代的な文学遺産『源氏物語』の魅力といえるであろう。

では実際に、『源氏物語』はどのように翻訳されているのだろうか。英語・ドイツ語・中国語の翻訳をもとに、『源氏物語』の冒頭文と全795首の和歌の最初の歌（桐壺の巻）を比較してみたい。

◆いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いとやむごとなき^{きは}際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり²。
◇かぎりとして 別るる道の 悲しきに いかまほしきは 命なりけり³

① 【Arthur Waley “The Tale of Genji” (2002, 初版1925, 1965)】

◆ At the Court of an Emperor (he lived it matters not when) there was among the many gentlewomen of the Wardrobe and Chamber one, who though she was not of very high rank was favoured far beyond all the rest.

◇Though that desired at last be come ,because I go alone how gladly would I live!

② 【Edward G. Seidensticker “The Tale of Genji” (1992, 初版1959, 1976)】

◆In a certain reign there was a lady not of the first rank whom the emperor loved more than any of the others.

◇I leave you, to go the road we all must go. The road I would choose, if only I could, is the other.

③ 【Oscar Benl “Genji Monogatari Die Geschichte vom Prinzen Genji” (1992, 初版1966)】

◆Unter welchem Herrscher geschah es wohl? – da war unter den vielen Nyōgo unt Kōi eine, die zwar aus nicht allzu hohem Hause stammte, aber die kaiserliche Huld am meisten genoß.

◇Obgleich wir wissen, daß unser Leben begrenzt ist, Scheiden ist traurich-wie gerne schritte mit Euch Ich weiter den Weg des Lebens!



④ 【林文月《源氏物語》(1985, 初版1974)】

◆不知是那一朝帝王の時代, 在後宮衆多女御和更衣之中, 有一位身分並不十分高貴, 却格外得寵的人。

◇生有涯兮離別多, 誓言在耳妾心苦, 命不可恃兮將奈何!



⑤ 【豊子愷《源氏物語》(2006, 初版1980)】

◆話説従前某一朝天皇時代, 后宮妃嬪甚多, 其中有一更衣, 出身併不十分高貴, 却蒙皇上特別寵愛。

◇面臨大限非長別, 留戀殘生嘆命窮。

現在『源氏物語』は、38余の言語・100カ国を超える国々で出版・購読されており、国境を越え千年の時を経て、世界の人々に読み継がれている。国際化の時代における日本古典文学への関心は、『源氏物語』を頂点とする諸作品の翻訳を通して一層の高まりを見せている。そうであればこそ、翻訳によっては伝えきれない平安文化や平安時代の言葉の意味を精確に伝える日本側の努力も、ますます重要になるのである。

1 海外出版情報<http://genjiito.org>/2013年度基盤研究(A)『海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国翻訳に関する総合的研究』代表者:伊藤鉄也。井上英明「外国語訳」林田孝和・原岡文子編『源氏物語事典』大和書房2002。

2 山崎良幸・和田明美『源氏物語注釈一』風間書房1999。「いづれの」から「時めき給ふ」までが主語句、「あり」が述語となる構文。「給ふ」が連体形であるために全体を統合(連体形による関係代名詞的統合機能)。これ以前の物語の冒頭文は、「今はむかし」(竹取物語など)「むかし～ありけり」(伊勢物語・宇津保物語など)であるが、『源氏物語』は「作り物語り」とは異なる歴史的な実在性に基づく表現となっている。『源氏物語』には、亭子の院・宇多の帝・延喜の帝や在原業平・紀貫之・小野道風等が登場し、醍醐・朱雀・村上天皇時代の人物が描かれている。「いづれの御時にか」は、歴史的な実在性を意識した表現。【現代語訳】いづれの帝の御代であったか、女御や更衣がたくさんいらっしやったなかに、真に高貴な身分ではない方が、他の方々をしのいで帝の御寵愛をお受けになるということがあったのでした。

3 上三句は死を覚悟した桐壺更衣の諦観、下二句は生への絶ちがたい執着と嘆きを詠む。「生かまほし」は(生か・まほし)。「まく」は助動詞「む」のク語法で、「まほし」は「まく欲し」から転じた語。生きたいと切に願う心を表す。【現代語訳】今は限りとして、お別れしなければならぬ死出の道が悲しく思われますにつけても、生きたいと心から願う、それが命というものだったのですね。